

<新刊紹介>中川成美・長谷川啓編 『高橋たか子の風景』

石割, 透 / イシワリ, トオル

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

62

(開始ページ / Start Page)

104

(終了ページ / End Page)

105

(発行年 / Year)

2000-07-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020131>

中川成美・長谷川啓編

『高橋たか子の風景』

石割 透

本書は、『高橋たか子自選小説集』全四巻の刊行から六年を経て、初めて刊行された高橋たか子論集である。高橋たか子の全体的な像を検討した第一部は、①水田宗子「絶対的な他者を求める不毛な自我の円環——高橋たか子の罪と夢」②鈴木貞美「ロンリー・ウーマン——出発期をめぐって」③須浪敏子「人形愛」の赤い薔薇④清水良典「沈黙を超える言葉——『靈的著作』に関する覚書」、その具体的な作品を分析、検討した第二部は、⑤増田みず子「『空の果てまで』」⑥稲垣直樹「『没落風景』——モーリヤックの『影響』を検証する」⑦長谷川啓「『誘惑者』を読む——内部の魔への凝視」⑧中川成美「魂の遊歩者——『装いせよ、わが魂よ』」論⑨種田和加子「『怒りの子』論——『顔』の主題」から成り、巻末に佐藤加奈「高橋たか子年譜」（須浪敏子監修）、「参考文献目録」を付す。多様な視点からアプローチした

これらの論文は、従来の評価に凭れず、高橋たか子の文学を捉え直そうとする意欲に満ち、いずれも充分に魅力的だ。

抑圧された近代女性の内に眠る〈夢〉と〈夢〉に注目して、「装いせよ、わが魂よ」に、それ迄の作品にはない「絶対的な他者による自己断罪と自己消滅を通しての救済の探求」を見る①が、本書の基底音をなす論考と思われるが、(ジェンダーそのものとされる)バシユラール理論などを援用し、「死という負の共同幻想を紡ぐことで、ジェンダー社会からの逸脱、脱出、越境をこころみた物語」として「誘惑者」を読む⑦も、性役割、ジェンダー的な視点に基づいていることでは①と共通する。また「他者不在」の点に、高橋たか子文学に対する不満を感じているらしい論者の姿勢も窺える①は、自己愛に焦点を合わせて「人形愛」から「甦りの家」の作品のヘエステチックなシンボルを解説する③、「靈的著作」を対象とし、「靈的著作」の言葉が「真理の誘いや啓示として理解され、交流する言語体系の世界」であるとすると④とも、論旨の底辺では共通していよう。「靈的著作」は、

それまでの高橋たか子の作品を写す鏡でもあり、高橋がやがて「観想修道女」となったことも、高橋文学が至りつく自然な方向であったことを思えば、現代人にとっての「宗教」の意味とも関わる「靈的著作」の検討は、極めて重要な課題であろう。④は、そうした重さに耐える優れた論考となっている。「パリに強靱ないのちの混在を求めて、そこに立ち向かい、取り込まれることを拒みながら、たった一人の闘いを試みる山川波子の精神世界を描いた、極めてアグレッシヴなテクスト」と「装いせよ、わが魂よ」を評価する⑧は、読み手とテクストの言葉との関係性を重視し、高橋の行為は「読むの快楽を読み手自身の『存在の根源』へと導く」ものであるとするが、高橋文学のそれが、読み手に対して根源的な存在の意味を常に問いかける、一種の踏絵的な性格を秘めたテクストであると看做している私にはまことに的確な指摘に思えた。⑧の論者の〈パリ〉に対する注目は、⑨の〈京都〉が背景であることとも関わり〈日本文化論〉として、〈顔〉と「包む」ことに焦点を絞り「怒りの子」を読む論

者の姿勢とも共通性が認められよう。

これらの論とはやや性質を異にして、(当然といえば当然のことであるが)高橋たか子とて一人の〈小説家〉であることを、思い知らされる論が、②⑤⑥である。②は、創作を試みていた論者の立場から、「誘惑者」より「ロンリー・ウーマン」を手法のうえで評価し、「言葉の正確な意味における当代の風俗小説」として、六〇年代から七〇年代の文化状況の中で、イマの視点も導入して「ロンリー・ウーマン」に高い評価を与え、⑤は「空の果てまで」を読んで作家になろうと決心した論者が、小説家の立場から、徹底して「読者の誰もが共感できそうもない主人公を据え」たことなどに高橋たか子の独自性を見る。小説家ならではの視点に拠り、率直な印象が記され、増田の文学を考えるうえでも重要なエッセイとなっている。⑥は、高橋に最も影響を与えたモーリヤックとの類似と相違を、ジュネットのナラトロジーを援用して検証、高橋がサルトルのモーリヤック批判を踏まえて「登場人物の自由を確保」するために、「視点を交える」方法を獲得、二〇世紀文学と

しての方向を示したことを論じる。これらの三本のクールな論は、高橋にとって、〈小説〉を書くとはどのような営みであったのか、なぜ〈小説〉なのかという、〈小説〉というジャンルの本質にも関わる課題を、読み手に与えるものとなっている。

編者長谷川氏の「あとがき」には、本書では「統一的な批評の視点を定めず、さまざまな読みの可能性をこころみだ」とあるが、ここに展開された多様な視角、〈フェミニズム〉〈ジェンダー〉〈内部の海〉〈自己愛〉〈霊的著作〉〈パリ〉〈京都〉〈テクストの書き手と読み手〉〈小説の手法〉〈モーリヤック〉、そして〈他者〉などは、いずれも高橋文学のキイをなすものであり、この論集が今後の研究の基本となることを思わせる。増田は高橋が「悪意と自己愛」を「ひたすらそれだけを書いた」として、そこに彼女の独自性を見ているが、人間存在の孤絶した根源的なありようを描いた高橋に対して、小細工や技術を弄し器用に論じることは許されない。徹底して外界に悪意を抱き、孤絶した存在として生きる他者不在の人間を、読み手に提示し続けた高橋たか子の作品

を読むことは、社会的な制度と適当に折り合いをつけて生きていくことの意味を問い返されることでもあろう。テクストに対して常に他者である読み手は、その時いかなる言葉で応答すればよいのか。その結果返される読み手の言葉は、やはり「『存在論的孤独』のエコー」(中川成美)に過ぎないのか。「絶対的な孤独」を言葉で突き付ける、「小説の始原的な意味」しか問わないテクストを「検討しようという企ては」やはり「無謀」な営みなのであろうか。本書は、そうした問いに対する答えを証すものでもある。高橋の姿勢は、ジェンダーやフェミニズム、自我、女性の内なる魔性、京都の町といった戦略的な視点さえも拒絶するほどに、ストイックなものであるのかも知れない。こうした高橋のテクストを論じるには、特別の息苦しさが伴ったと推察されるが、それを論じるに相応しく、誰もが真摯に立ち向かっている。そうした論者たちの姿勢にも共感を覚えた。

(いしわり とおる・駒澤短期大学教授)
▽一九九九年十二月・彩流社・二五〇〇円